

掌中嵐雪發句集

初編

全



掌中嵐雪發句集初篇

春之部

改正

比海波魚のさう年阿まの春  
 え目やまねく有乃物かごと  
 面くの塘とけふや苑のたる  
 今朝まの奥孫も有りまホマの撰と夏  
 五十ふと四谷をらんくろ苑のま

初冬や 鳥を跡を於牛の鞍  
惟茂と起しよ来る二日の事

けりと睦月二日又あさおせしと人の  
起せしみかくやとあししとあや

宝ふみ子 初冬あさあまの畧

以广めえんね藤とあや 宝ふみね

美菜七時ぐひと別まの初照

七菜を云之屋んうつこ子首う那

ぬれ掬や暮こるうく 去ちうう

夫 毒 とくをなはれぬちうあしむつと歌

歌ふうは

布つくと 喰拵あうは 夫婦成

学

雪にほうと息まゐる山嶽うね  
うらひまや虫院の面戸はくくる音

梅

正免一掃一平ん布と姑あつてかた

けるあま集よ冬を飛入とて  
又あま集よ

おとらふ一字歌

子孫のうぬ宵中を梅の木より  
梅もさや 齒のあふるに死す

相取のあま京うらまありとておぬめり  
是東あま知入るをさくよまらのやとら  
くといひあちて平一とて河部のむの香道

あまあまあまあまあまあま  
あまといと名残あま

梅よさむる物もりさるる幸よこの

椿

振のかう眼目かんて花はさき

歌しらす

正月をす月よあうりま難考大  
下澄のあうさそあうん南都 雑

せりしちりささるる夜よりり作り種活  
露のさうりほろもく人の跡の那  
をんまよかろりく

われも急猫よ物類曉てうろけり

燕

簾よ入るる美人よ列るる燕外  
柳よふらそたのれ嵐あり夕燕

帰る

明鏡よあまうりさり 板屋うね

惜誓別

虚をを引とく免まやいうたれも  
蚊豆り鄰かへきるはわはうとく  
砂夕へ朝増るるぬいさぬり

蛙合

うしあやささの芥とゆく 蛙  
上野よりあまのつるさく

酒くらひ人よかきまる 胡蝶うぬ

翁月

中川やちをみんても 繼月

おろりやま門平 張 辰の市

接

えきふお花もさくらよと 接 穂花

苗代

おろり一海よ老のちろろや 鹿たき死

上巳

うほは女の雛かつくそ衣たる

草のよきく條つらん 州乃條

汐下よ

汐下くれ 袴懈う 袴引あそぶ

桃

桃の目也 解ハ美人よ笑ろろ

養

白き乃酒と吐くんそれの也  
 花と風かろくさそあけ酒の泡  
 橋川をゆく流きま柳の里にまをる  
 膝木よるま女いそしや糸はら  
 殿は精妻餅うるはらるる葉を  
 子習は師を車なや花の見  
 兼好の楚ねりりり花さうと

頼光山入之賛

ちあはる花風おくれまう山さう  
 花片く散平たうる古松先キ  
 月屯のまひとあしや火明行  
 女中アミセ花前ま花の先達  
 大和島に東潮老うはく風車東風  
 ちうし西へ行に吹まをられ前後  
 多良根根さう形あり大井川越  
 馬り大太廣く空高く風の何う吹中

遠坂を 園中跡あり 其れの手  
大井川 船有る 其れ乃たひ

躑躅

公津し まるく 角やう

友 初より 男ス

少ち浪より 鶺鴒 三廿三 たり 其れ

小奴 喜命より 花を 見せ

小坊より 是を けり 松より 友

夏之部

更衣

塩魚の 妻は 日あり 衣うえ

揚を 野より 捨ると 捨り 那

衣簾

五位六位 色く 青す 其れ

時鳥

引燈を 舟の 歌よ せん 支は



本とくきに恥くき道具かろらん

待乳山の社改よぬをよききく

空とる雲よ蚤籠のときぬ郭 公

時多 晴や利休乃落し穴

悼晋子之母

啼いりく喜もれしものを時多

中とくきは旦夕里さひ煙う川比

清成篠いうるる節をけくきす

科とまうく

櫛奏あやうは花乃飯をるる

川骨や橋よ桐め秋夜中樂

經の偈を連ふるとくぬ時多

ひ三句ハ晋子退るるの吟ありとき

懐旧

かゝひるる妹ちうけ給せあ楓

牡丹

古くはよ阿りありくはほくん分  
土膏くさくかむ顔り牡丹分  
青嵐

まふりし定まる時や苗の色

新樹

よめふく風やたんとお割り

くさみ海邊くさみ

勇るよ来下園れ紙帳るま

大勢の中へ一本から不う那

徳州

煮るたらくまてもお怪愚おる也

毒々大悲親世音かきるとおうよう

くさみ連まきり

素笑ふお名とくの老女疑違若

燕居も海うく見りくされく

くさみ縁る形まらうく友もあり

笋

井の子やわらわ藤の床の隅よも  
善喜光ちよそみる喰ひる尾よ

海松あまやわれとてしも寺の尾

渙父

義ほくく短くくあふ螢う那

照射

ち杖よ喬より歌のやまのゆる

端午

あさり尾の長をくく年菖蒲を

世のつをめえんや菰乃髑髏

曾根ち糸をせりを根は糸とらる

片足ハ世よ故つてかあとの那

粽一かき全阿袖あしあを福あり

かこむまきまらに

粽ゆめおとらけ乃まむまひ

標佩くわさく免うーや芝肴

中地

おろし人よあられ中地のそと礫

競馬が又茂

落まるといふに目まやあー様

抜劔逐蠅

蠅をちき怒るゆよ子束弓

顔ははく飯粒蠅の折ゆーを

題

それよ又新ひ絶めや金の蜜

免つしや唐の故侍人を喰つく桃虫

こゝろゆしやかの故美人の様子こゝろを

瘦く柳又似まうりか新の故く

唐の故や終る枯くろ藤垣よ

世の唐紙又故と濡れらるよあれ信

教書本や芥子女の石をうり

兼黄

山茅黄のかさ〜や重きあ〜嵐

夜雨吟

又りぬや祝祭を於唐か〜し

〜〜〜んや蚯蚓の徹以 錦の装と

題〜らぬ

嘗て吾を入あや〜二ツかし

子乙女よかへ〜丸をる菜飯う那

三河風来古

一ちらのあゑいを登る山路う那

赤麦歌

操鳴や麦をうらるる〜と

六本木うそ

下雲如地虫あ〜乃操の聲

あれうあ〜暮らんと〜侍、操のあえ

江の鴨

夏の日や ささきく 崖のらあひうり  
稲村の傍せらるる木陰ともあそびの  
うへは 渙父のこころごとくかまひいり  
をあつとをさゆる

照付く 雲りも暑し 海に上  
貝うる家の隅のまじり 麦の粉を盆に  
りつてかいら 橋さくちあめさるに水をさて  
登の子れたうと 加うせん 道明寺

長谷ちの 若うき

館 高次のひねりさうとや ゆりの花  
法見堂 さくつをとりあ入り  
行ぬらひ 小松より 平く 沖津風  
雲の下は 濁り 傳りしよ 板子たさ  
キとく けさか せきれたを みよしの  
あちよむしうあそく

川 草のふまはらう 白ふ 茂りう 船

藤沢を穿り 民家の門小本を根を去せ  
枝のうらうらみ天をうらうらみくたちよ 節り  
ありえ本多くゆく肥て末葉もつて  
境端の發をまき鼻ふかたふらふら  
這山をまきゆりの中より松をゆやゆ  
嶽嶽松を山のうらうらみかき山名のまき入  
竹をたきまきまき

帯にありまきまきせん 松の陰

納涼

火よ近大を退ふ 舟の流るる  
舟車のあつとせうけく

すくすくやんまんとる 舟の色

逢ね急

我もやんもすのまぬ まき鬼灯  
市婦をたふれえ抱ふれとて人  
移るまん涼くして入移るる

河上橋を風すく風く竹籬傳  
ぢんをうけ和沖とはまや汗拭  
目も息の倦も人のまふてぬ日

霞くま川を乃塵そ志川を流く  
夏烟よ折くくうらく思穂うね

御後

今日の日は東雲の隅よりあてぬ水の方  
おさほる長日短秋の頂上るりとてはまの

法をなれぬくくくくくくくくくくくく

ゆきくくくくくくくくくくくくくくく

む後まきと初あるる

いんはくみみ息つきを復はくくく  
ま川をくく目のけくくくくくくく

秋之部

初秋

秋風の心くくきぬ 澁すくれ



はるりあけ糸とひらきや秋の風

葛

齒の河とみわを葛の葉あはらるる表

宗祇之廟

石塔をまてくる休む一処ふり部

市中

盆とる秋とる門乃灯籠が

七夕

去秋事やあうかきやるる入の川

あし合や警女も糸ひの糸とるん

けし合の糸妹うさん待女糸

防鴨河使

妻越や人目流みみの河片を

梶の葉とあうかきとる

糸やあぬひと流るる糸天の川

糸流るる偶田川糸の梶柱

花も并みんえとの蹴鞠いぢの坊のき花  
こやこ花田丈いぢの風流まてく見るあり  
居るく見居あり

秋空のうらみ海を眺くまむか  
薄

花まの足踏子つまきくさけか  
お川へ二里お休や花すま  
聖の集

おちり海く富士にまけくふ花聖か  
おの秋草よ冷めく聖さるうま  
盆のよはせ切歌めく一字を探る

潜 洗  
くさせく色くくはく花のあ  
虫 寺く

花燈や聖めくく花のりくす  
兼虫のまてきくはくまの巻 芭蕉翁

史よゆさく

洞もまきあし稲うららめく蜜か

七孫

草の葉を花ひわりけよ露の玉

うすひ様現るそ

いなつまのきくぬ神子ら目さき

鶏取

まこと友形ふあしひや染鶏取

朝叟ととらふ

蓮の實み花をよひしうそまされん

同一周忌

まきやく屋ひとりおきく一周忌

西瓜

身ひとりをよそてあつる瓜うね

盆會

喰もたを皆あきし魂まらり

多戸 柳や皆の後にと若子何く

河を略

そはあがり安ら 影を心とてこちり

九日の方及まのそ小野のたむら

冥途よかまゝる及あまのそ海甲結貴

然まきく橋の系どりのそを現とむら

平とく侍る

おをひくく物とそりつくむく人種

霊秘の粟よとてたての家の宗か車

わりのそ美徳やとゆえを所あきそ旅のちりれ

こくまる西六千日とそまきまおとそまきぬ

盆のこお病ハ秋とそ群集しそ逆縁平

とちり婦人もたきと侍りまを改名嵐を月

照と名の塔保あり形入をよりあるまうたそ

あしねとおりがくそをひきまをたおんえ侍り

きれえ

夢よよく似る言はむ暮るあり

松う傍妙法の火

絶を焼く火のたうとを秋の風

大文字の分をも免とれた

山の端をたうもんをや大文字

子車と動へようはるおとりのり

海原の介もそむるや 藍 島

度りも賣はるモス乃 菜 藷 亦

蘭 鮑 同 肆

益する薬や乞食乃 簞乃下

秋 暮

寐く起く又寐てんそも秋の音

殊の音石山寺乃 鐘 亦 乃 は

月

念月や烟遠ゆく 水乃く

死折新幾をよ戸不を起く



明月や及心の名のおりしき  
新年とふ弁よりあそぬ身んか

信濃備る樂

君月夜を移らんせん後流の美とに

新酒

神美若草

子歌もしし新酒と人の醒やす

歌あそび

もせ釣や水村山廓 酒於風

何しの穂やおやちと峰六波しき

木犀の昼を醒まる 香炉うね

柿栗

ひとり様あふ柿うささ顔ハ雅

標第

林間よ焚燧する日をたしめ

くら木とまおほくめされそ振草

菊

初菊やかしらの頬の白さゆと  
指し入る風を也きくしりふれ葉  
菊九章其一九日

菊もまことつゆくつほむ九日

其二 素き亭にて入る葉  
乃くれり

かられぬやうめ葉の中は変る葉

其三 百菊を拾ひて

黄菊白菊を介の名をわくもが

其四 名所の菊

白きく子 鎌倉やすはる扇り谷

其五 草のたけのこひひかあるハサのまき  
きくし葉をてりてりまき

花の如く葉七尺乃なり免この那

其六 琴

琴を流る葉をうなはく蹴るを

其七 碁

葉をふると又碁よまけし人やん



其八書

半を抽<sup>ヒ</sup>芭蕉は絲<sup>ヒ</sup>糸<sup>ヒ</sup>葉の児

其九岳

葉さけと蝶<sup>ヒ</sup>ま<sup>ヒ</sup>遊へ繪の具皿

京よりかゝ<sup>ヒ</sup>隣へ<sup>ヒ</sup>踏<sup>ヒ</sup>る<sup>ヒ</sup>そ<sup>ヒ</sup>あ<sup>ヒ</sup>る<sup>ヒ</sup>

山<sup>ヒ</sup>城<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>す<sup>ヒ</sup>る<sup>ヒ</sup>こと<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>

志<sup>ヒ</sup>か<sup>ヒ</sup>笑<sup>ヒ</sup>越<sup>ヒ</sup>と<sup>ヒ</sup>わ<sup>ヒ</sup>り<sup>ヒ</sup>〜<sup>ヒ</sup>彼<sup>ヒ</sup>や<sup>ヒ</sup>葉<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>花<sup>ヒ</sup>

軒<sup>ヒ</sup>より<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>れ<sup>ヒ</sup>と<sup>ヒ</sup>笑<sup>ヒ</sup>ぬ<sup>ヒ</sup>き<sup>ヒ</sup>く<sup>ヒ</sup>出<sup>ヒ</sup>登<sup>ヒ</sup>

表<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>葉<sup>ヒ</sup>杖<sup>ヒ</sup>り<sup>ヒ</sup>ま<sup>ヒ</sup>ぢ<sup>ヒ</sup>れ<sup>ヒ</sup>ん<sup>ヒ</sup>お<sup>ヒ</sup>き<sup>ヒ</sup>ふ<sup>ヒ</sup>も

鈴<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>菊<sup>ヒ</sup>よ<sup>ヒ</sup>と<sup>ヒ</sup>鈴<sup>ヒ</sup>に<sup>ヒ</sup>餘<sup>ヒ</sup>と<sup>ヒ</sup>も<sup>ヒ</sup>胡<sup>ヒ</sup>蝶<sup>ヒ</sup>か

蝶<sup>ヒ</sup>と<sup>ヒ</sup>さ<sup>ヒ</sup>〜<sup>ヒ</sup>蝶<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>糸<sup>ヒ</sup>あ<sup>ヒ</sup>る<sup>ヒ</sup>如<sup>ヒ</sup>葉<sup>ヒ</sup>は<sup>ヒ</sup>葉<sup>ヒ</sup>

これをを<sup>ヒ</sup>そ<sup>ヒ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>ま<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>柏<sup>ヒ</sup>子<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>わ<sup>ヒ</sup>ち<sup>ヒ</sup>る<sup>ヒ</sup>如<sup>ヒ</sup>

井田<sup>ヒ</sup>葉<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>ほ<sup>ヒ</sup>〜<sup>ヒ</sup>み<sup>ヒ</sup>ら<sup>ヒ</sup>り<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup> 蚊<sup>ヒ</sup>足<sup>ヒ</sup>

ひ<sup>ヒ</sup>や<sup>ヒ</sup>〜<sup>ヒ</sup>さ<sup>ヒ</sup>〜<sup>ヒ</sup>あ<sup>ヒ</sup>つ<sup>ヒ</sup>ま<sup>ヒ</sup>あ<sup>ヒ</sup>り<sup>ヒ</sup>〜<sup>ヒ</sup>や

花<sup>ヒ</sup>す<sup>ヒ</sup>〜<sup>ヒ</sup>大<sup>ヒ</sup>念<sup>ヒ</sup>流<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>ま<sup>ヒ</sup>つ<sup>ヒ</sup>〜<sup>ヒ</sup>ら

初<sup>ヒ</sup>ま<sup>ヒ</sup>り<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>跡<sup>ヒ</sup>

神<sup>ヒ</sup>つ<sup>ヒ</sup>〜<sup>ヒ</sup>に<sup>ヒ</sup>も<sup>ヒ</sup>つ<sup>ヒ</sup>〜<sup>ヒ</sup>〜<sup>ヒ</sup>家<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>時<sup>ヒ</sup>を

孤林 孤系

牛まれの葉をかくに 極る南

莊子樗木の大きき牛をかくする系の碎

さを一少くと色化されんと 放散逍遙

のぬをむれるあり

ちり好も二度の情や 梅をこころ

まうまのまて

暮の染や津この身あろく かくる時

冬之部

十月 蟋

こころしく 以 鼠の巢をて 鳴 終るぬ

風

木かもし 梢の柿乃 名 残る那

芭蕉翁 回卿

風の吹く ゆるく ころまらざるが

一袋ちり いろく ちりまら 月夜

山家集

いざさらやのあそびあそびも消えてに

延喜帝

空衣ふ困土の民もかきうらふを扱  
の却とくそ御衣とぬを寝ひらふとあり

脱ふまふ御衣とて下給念う那

野

野ひくねの日を忘るく野々古葉吹

みその日衣をまてあそび

君見よや我ふいそそ昔子の桶

河沙

鴨ありくく多まそよあむ水うね

野美深

あめ朝の嵐やつむけるあみそ

十月廿五日共挑隣出武江而暨

義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱

皇朝御紀

上喜

夢見月七日のゆめつるよの程千受伸吉  
の家上よひさまつく空華一教一水月  
うちをみ守付心鏡一塵をひききんを万  
象よくうはるは師そのたよおめく  
まつらうを利し他を利しそ終り其  
神不竭今も凡めんそを呼強人をそ  
び下よかく秘むるらん電あてけ

十月廿二日夜

十月を夢うとけりけりたつたれ

四七日 題翁三物

本わりの猿木到深り義と立

十一月十二日神月忌

泣中よ多き象ひたり 耐へるり

え禄乙亥十月十二日一周忌

夢人の縁を魁めを 納豆火

七四忌

皇朝御紀

皇朝御紀

多岐時ぬきれもびうや坐興竜

十三回

ふくの蒲団よのちる木奥か

帰依法 肉もこの菜と喰ふ

飯のやうな腹とさするあけ敷

坊と泣くあがり

あふりつとを不屯かこひひりあ

神系

かろく舟漕の釘の御火白くさけ

雪

蛇もせよ木壳もせよゆさの猫

知をもや襦くとぬ白丁死

今の藤田ようしゆり門も見すてこて

飛流の火を射さうにこそ笠の雪

的鼻とらと食もよんらるるをのう

る中しをを投込あそひう那

雪をまきうさぐさ 先づは家の籠渡山  
けりきりむらひおくらぬ人も人

何れ

顔半くもくもく とうらん玉あられ

画賛

細巾よりよき静やす 拂

歳暮

山伏乃りんそん ちま 師走外

古足袋の四十よ 足とあしあしぬ

慰女房

三盆子とるもくもく 年終書

古曆けく交人うらま ちま せん

思見すと妹くろひぬ ちま の門

新の枡梅を探り ちま おほのちま

足をくま ちま ちま ちま ちま

けりきりむらひおくらぬ人も人

崖

十

くひふよ服をさへやまの吟きよ

著まらうらそく貞器白く年の昔

猿猴のてふそとからややうのれ

辞世

一はあらし一はふらね風のそく





俳諧集艸第八集

掌中嵐雪發句集

編初

江戸本石町十軒店 英大助